

29 「棗椰子の木陰の文学」 岡真理

■凡例

- 1 ①②…は形式段落番号。◆は、設問。 2 ▽は、本文の追跡・分析。
 3 ▼は、読解に関する技法。 4 ☆は、記述に関する技法。

■見通しと追跡

① ● かつてサルトルは、アフリカで子供が飢えているときに文学に何ができるかと問うたが、米軍包囲下のファッルージャで、あるいはイスラエル軍再侵攻下のパレスチナで、イラク人やパレスチナ人の命など虫けらほどの価値もないかのように日々、人々が殺されているこのとき、いったい文学に何ができるのかという問いは、アラブ文学に携わる私自身の痛切な思いでもある。

▽明確な問いの提示。飢餓や戦争に対して、文学は何ができるか。挙げられているパレスチナ問題は根深い。イスラエル軍はガザ地区を攻撃し、子どもを含めた多数のパレスチナ人が殺されてきた。それに対する報復。憎悪の連鎖はやまない。

フोटジャーナリストの広河隆一氏の監督による、パレスチナ問題をめぐる「NAKBA」というドキュメンタリー映画がある。氏には、岩波新書に『パレスチナ』と『中東 共存への道』という著書もある。映画を見たある人のブログにはこうある。「：テレビのニュース映像を通してくらいしか「パレスチナ問題」を知らない人の中には、自分の信じていた「世界」が、足元から揺らぐのを感じる人も出てくるだろう。揺らいでほしい。僕は切にそう願う。」

② ● サルトルの先の問いかけを契機として開かれたシンポジウムでは、文学は、アフリカで子供が飢えているというまさにその現実を私たちに伝えることができるのではないか、だから文学は決して無力ではないのだという応答があった。だが、その答えに私がにわかには首肯しかねるのは、例外的状況が日常と化したイラクやパレスチナの現況では、彼、彼女らが生きていくその生の内実が文学作品として必ずや形象化され、私たちの手元に届けられるにしても、それはまだ幾年も先の出来事であるように思われるからだ。現に、占領下のヨルダン川西岸地区に暮らす作家のリヤーナ・バドルは「人はつねに作家でいるわけにはいかない。このような状況下では小説家であることをやめ、ジャーナリストたらざるを得ない。」と語り、ペンをビデオ・カメラに持ちかえて、パレスチナの現況を直接、世界に発信すべく映像作家に転身している。「今、ここ」の現実を世界に知らしむという意味では、それはむしろジャーナリズムの仕事であって、生きのびること、日常生活を維持することそれ自体が闘いと同義であるような生を強いられる「今、ここ」の過酷な現実のなかで、◆1文学は依然、無力であ

ると言わざるを得ない。

▽文学は現実を伝えることができる。それが、①の問いに対する一つの答え。一般的には、たしかに文学は、現実を伝える力をもつ。しかし、筆者は、文学は、(生きのびること、日常生活を維持することそれ自体が闘いと同義であるような生を強いられる「今、ここ」の過酷な現実)を伝えることはできない、と考える。

◆問1「文学は依然、無力であると言わざるを得ない」のはなぜか。

「〜からだ」が明示されている。「その生の内実が文学作品として必ずや形象化され、私たちの手元に届けられるにしても、それはまだ幾年も先の出来事であるように思われるからだ」。「その生」とは、「生きのびること、日常生活を維持することそれ自体が闘いと同義であるような生」である。これらをくつつける。

「解答例」「生き延び、日常生活を維持すること自体が闘いであるような過酷な生の内実が、文学作品として形象化され、私たちの手元に届けられるには幾年もかかるように思われるから。」

③ ● 二〇〇三年三月、米英によるイラク攻撃が目前に迫るにつれ、私が住む京都の街でも、攻撃反対を訴えるデモや集会が緊迫度を増して開かれていた。そんな集会のひとつで、ハンドマイクを握りしめ反戦を訴える一人のイラク人男性と知り合った。海洋学を専攻する彼、マジードさんは、京都の大学で研修中だった。後日、お茶を飲みながらお話をうかがった。

④ ● マジードさんはバスラの出身だという。バスラってどんな街ですかと尋ねると、彼は言った。バスラは旧約聖書の時代にまで遡る、とても古い都市なのです。バスラは石油だけの街ではありません。別名、マディーナト・ル・バラフ、つまり棗椰子の街とも呼ばれています。かつては何百万本もの棗椰子があり、それはそれは美しくったものです。でも、今は、たび重なる戦争によって十分の一に減ってしまいました。…：：：そう語る彼の声は沈痛な響りを帯びていた。「バスラ」の名が新聞の見出しに大きく踊り、破壊された油田からたちのぼる黒煙を背景に、米軍の戦車の前を逃げ惑うイラク人親子の写真が報道されるのは、それからほんの数日後のことだった。

⑤ ● マディーナト・ル・バラフ、棗椰子の街。彼の口から発せられたその言葉を耳にした瞬間、干した棗椰子の実の、あの柔らかい食感と濃厚な甘さが口腔に甦り、同時に、棗椰子の繁るオアシスの光景が私の脳裏に広がった。私はイラクへは行ったことがない。でも、棗椰子の林なら、かつて暮らしたモロッコで幾度も目にしたことがある。黄褐色の砂漠と空の青のまぶしいコントラスト、砂漠を縁取る棗椰子の瑞々しい緑。そういうえば、あるとき訪れた中部



アトラス山中のオアシスの村では、老人が行きずりの旅人を家に迎え入れ、ミントティを振る舞ってくれたことがある。グラスに熱いお茶を注ぎ入れながら、老人は問わぬ語りに語った。……若い者たちはみな村を出て都会に行きたがるが、都会に行つたところで仕事があるわけなし……村にいれば、アッラーの恵みに不自由するものはない、パンとミントティと棗椰子があればじゅうぶん幸せに生きていけるものを。……そうやって老人は、丸い大きな皿に山と盛られた棗椰子の実——神の恵み——を私たちに勧めてくれたものだった。

⑥ ●モロッコの中部アトラス地方の棗椰子の林とバスラの棗椰子の林は決して同じではないだろう。だが、モロッコのオアシスの村で出会った老人の言葉は、たとえば「**読1**」**棗椰子とともに生きる人間にとって棗椰子というものがいかなる存在としてあるのか、ということ**を私たちに教えてくれる。

バスラの人々もまた、何十年、何百年と、棗椰子の林とともに生きてきたにちがいない。棗椰子を生活の糧とし慈しむ——季節がめぐりくれば受粉させ、実を収穫し、油を搾り、石



鹼を作り——、天に向かって高くまっすぐに伸びる何千本、何万本もの棗椰子の林を故郷の記憶の原風景として。……爆撃は油田を破壊するだけではない。爆風は木々をなぎ倒し、炎は林を焼き尽くすだろう。人々の大切な生の一部、故郷の原風景、記憶の一部を破壊するのだ。焼かれ、引き裂かれる木の痛みや叫びはそのまま、バスラの人々の心の痛みや叫びに重なるだろう。バスラの人々が棗椰子とともにどのようにその生を営んできたか、その具体的な生の細部を私たちが知らないならば、**「読2」****「戦争の惨禍」**なるものを伝える記号にとどまり、棗椰子とともに生きてきたバスラの人々の心の痛みまでは思い至らないのではなかろうか。

▽バスラ出身のイラク人、モロッコの老人、二つの挿話を通じて筆者がいたかったことが、⑥に至つてようやく顔を出す。ジャーナリズムによって「**焼け焦げた棗椰子の映像を私たちが目にする**」。しかし、その映像は「バスラの人々が棗椰子とともにどのようにその生を営んできたか、その具体的な生の細部を」**「伝えない**。だから、私たちは、「棗椰子とともに生きてきたバスラの人々の心の痛みまでは思い至らない」。ここで批判されているのは、報道映像。では、何が、生の細部を伝えてよこすのか。

⑦ ●世界の耳目がイラクに集中するなか、イスラエル軍再侵攻下のパレスチナ、とりわけガザ地区では、毎日のように、パレスチナ人の住居が安全保障上の理由からイスラエルの軍事用ブルドーザーで組織的に破壊されている。おびただしい数の人々が住処を失い、廢墟での生活を余儀なくされている者も多い。また、二〇〇二年四月には、西岸北部の街ジェニンでは、テロリスト撲滅を掲げて侵攻したイスラエル軍に

よって、隣接する難民キャンプ中央部が百メートル四方にわたって徹底的に破壊され、住宅密集地は土砂の海と化した。

⑧ 瓦礫の山の傍らで、スカーフを被り、伝統衣装を着た年輩の女性が両手をあげ、天を仰いで泣き叫ぶ姿。テレビのニュースが、パレスチナにおける家屋破壊という出来事を伝えるときの定番となっている映像だ。そこでは見事なほどすべてが記号と化している。瓦礫の山は「破壊された家」の記号であり、スカーフと伝統衣装は「パレスチナ」の、泣き叫ぶ様子は家を失った住人の「悲嘆」の記号である。こうした記号化された映像は、わずか数秒で出来事を効率よく切り取って視聴者に伝えるが、それ以上に家屋破壊という出来事が起きるたびに同じような、**◆2個別性を剥奪され、ステレオタイプ化した映像が反復されることで逆に、視聴者の目に出来事自体を陳腐化させ、出来事の意味、すなわち人間にとって家が破壊されるという出来事が意味するものそれ自体を徹底的に無化する**という効果をもっている。



▽報道映像批判が続く。報道映像は、ステレオタイプ化する。その結果、出来事の意味が見えなくなるといふのである。人間の慣れといふのはおそろしい。刺激の繰り返しに対して「あ、また、あれか」と、反応しなくなるのである。

◆問2「個別性」とはどのようなことか。

⑥の「バスラの人々が棗椰子とともにどのようにその生を営んできたか」という表現を借りると、「一人一人が営んできた生活の在り方」、それが一つ一つ異なっているということがいっている。一つの一つの生活は、それぞれかけがえのないものであるということが、報道写真によって、見えなくなってしまうのである。

「解答例」「一人一人が営んできた生活の在り方が、それぞれ異なっている」といふこと。

⑨ ●だが、人間にとって**◆3「家」**とは単に、雨露をしのぐ屋根を意味するだけではないはずだ。「家」が破壊されるといふ出来事は単に、ブロックでできた箱が瓦礫の山になることに還元できはしないはずだ。阪神淡路大地震の被災者が、海外で大地震が起きるたびに、被災者に対する支援活動に積極的に関わり組むのも、住まいを失った人々が被る喪失の深さや精神的打撃の大きさを誰よりも深く知っているからだろう。

▽問いの提示。家を失うことが意味するものとは？ 問3は、⑩を読んでから。

⑩ ●半世紀以上も前、暴力的に故郷を追われ、家も知も財産も一切を失いキャンプで生きてきた難民たち。やがて歳月の経過とともに、国連から支給されたテントはト

タン屋根とアスベストでできたバラックとなり、バラックはブロックでできた家になり、家族が増えるにつれ二階、三階と建て増しされ、わずかな蓄えができるたびに子どもたちのベッドを、家族のためのソファを、妻のための鏡台を、箆笥をと買い揃え、マントルピースの上には人生の折々に撮られた記念写真が額に入っていくつも飾られ、そして、今度まとまったお金ができたら高校に進学した次男のために屋上に勉強部屋をしつらえてやりたいとか、もうすぐ結婚する長男の寝室を整えてやりたいとか、そこには、これまでその家で家族一人ひとりが生きてきたたくさんの思い出とともに、ささやかなたくさんの未来の夢や願いが込められていただろう。それが、ある日突然、占領軍のブルドーザーによって何もかも破壊され、ただの瓦礫の山にされる。失うものさえもはやなく、残されたものはただ、未来に対する絶望と占領者に対する限りない憎悪だけとしたら……？ 娘をパレスチナ人の自爆者に殺されたイスラエル人のある母親は言う。「娘を殺したのはイスラエル政府だ。パレスチナ人のオリヴを根こそぎにし、彼らの家を破壊し、テロリストを育てているのはイスラエル政府なのだ。」

◆問3 「『家』とはどのようなものか。

⑨⑩から該当する箇所を抜き出してみると、「単に、雨露をしのぐ屋根を意味するだけではない」「単に、ブロックでできた箱」ではない、それを失うことは、「深い喪失感、たいへんな精神的打撃になる」、「これまでその家で家族一人ひとりが生きてきたたくさんの思い出とともに、ささやかなたくさんの未来の夢や願いが込められている」場所。これらを組み合わせる。

「解答例1」「家とは、単に雨露をしのぐ屋根を意味するだけではなく、これまで家族一人ひとりが生きてきたたくさんの思い出とともに、ささやかなたくさんの未来の夢や願いが込められている場所。」

⑪ ●ジャーナリズムは戦争といった問題が起きてのちはじめて、それらの問題が生起する社会について伝える。だが、大切なのは、そうした出来事すべてに先立って、人々がどのようにその生を営んできたか、何を愛し、何を慈しみ、何を大切に生きてきたか、そうした生の具体的な細部ではないだろうか。それを知らなければ、私たちは、戦争や占領が、彼、彼女らからいったい何を奪い、何を破壊したのかを真に知ることもできない。そして、戦争や占領が人間からいったい何を奪い、何を破壊したのかを真に知らないままに唱えられる「反戦」や「平和」は、それがどれだけ正しくても、◆4抽象的なお題目にとどまるだろう。

◆問4 「抽象的なお題目にとどまる」とはどのようなことか。

☆抽象と具体の対比。抽象的⇨具体性を欠くというのは、「戦争や占領が人間から

いったい何を奪い、何を破壊したのかを真に知らない」ことをいう。
 「解答例1」「戦争や占領が人間からいったい何を奪い、何を破壊したのかを、具体的に真に知らないままに唱えられる「反戦」や「平和」といった言葉。」
 「解答例2」「戦争や占領が奪い、破壊した、人々が営んできた一つ一つの生の具体的な細部を知らないまま、言葉の上だけで平和や反戦を唱えること。」

⑫ ●記号に還元されない、人間が生きる具体的な生の諸相を描き、私たちの人間的想像力と他者に対する共感を喚起するもの、そのひとつが文学作品であるとすれば、冒頭のサルトルの問いに対する答へのひとつがここにあるのではないか。サイドが『オリエンタリズム』で、合州国（アラブ）の中東言説において中東の文学に対する言及が欠如していることを指摘し、文学に対するこの無関心が、中東の人々をステレオタイプ化し、「私たち」とはまったく異質な「他者」として彼らを本質化するオリエンタリズム的世界観の構築と実践に深く関与していると語っていたことが、今、あらためて想起される。イラクで、パレスチナで、アフガニスタンで、人々が殺されている今だからこそ逆に、「読3」文学なるものが、ほかのいつにも増して切実に求められているのだと言える。「今、ここ」の悲惨を伝えるためではなく、そうした惨禍がなかったならば、人々が送っていたであろう物語、棗椰子の木陰で愛を語りあう人々の物語や、オリヴやオレングジュやレモンの木と戯れる子供たちの物語、人が生きることの哀歓を私たちに感じさせてくれるような物語が。

▽問いに対する答への提示。文学はどんな力をもつか。人間が生きる具体的な生の諸相を描き、私たちの人間的想像力と他者に対する共感を喚起する物語を描くことによって、踏みつぶし焼き尽くそうとする兵士を人間に引き戻すこと。これは、本質的な回答である。私たちは、そこに自分と同じ人格性を感じる相手を殺すことはできない。戦争を可能にするには、相手を「ステレオタイプ化」する工夫が必要なのだ。「あいつら」とひとくくりにすること。文学は、それとはまったく逆の力である。

■読解問題1 「棗椰子とともに生きる人間にとって棗椰子というものがいかなる存在としてあるのか」とあるが、筆者は棗椰子の存在についてどのように考えているか、説明しなさい。目安八〇字。

⑥から表現を探すと、傍線部直後の「バスラの人々もまた、何十年、何百年と、棗椰子の林とともに生きてきたにちがいない。棗椰子を生活の糧とし慈しみ——季節がめぐりくれば受粉させ、実を収穫し、油を搾り、石鹼を作り——、天に向かって高くまつすぐに伸びる何千本、何万本もの棗椰子の林を故郷の記憶の原風景として。」に目がいく。この部分を「棗椰子とともに生きる人間にとって、／棗椰子というものはくであると考えている。」と☆構文を変えればよい。

前半は、「何十年、何百年と棗椰子の林とともに生きてきた人間にとって」と置き

